

乙訓歯科医師会から健康教室

Dental Association Otokuni

「親知らずの抜歯について」

歯医者さんで歯を抜いた経験のある方はたくさんおられると思います。例えば虫歯や歯周病によって残しておくことが難しくなった場合や、生え変わりの為に乳歯を抜歯するという状況が頭に思い浮かぶのではないでしようか。

さて、歯医者さんや歯科衛生士さんに「親知らずを抜いたほうがいい」と言われたことはありますか。親知らずは10代後半から20代前半ごろに親に知られることなく生えてくるのがその由来だと言われており、専門的には「第三大臼歯」や「智歯」といいます。前から数えて8番目の歯で、顎が小さくなった現代人では真つすぐに生えるスペースがないため、歯

茎に埋まっていたり、生える方向がずれたり、残念ながらあまり役には立ってくれないことも少なくない歯です。

それどころか手前の歯との間にできた隙間は清掃ができないため、歯肉の炎症や手前の歯の虫歯の原因となったり、奥から手前の歯を押すために歯並びにも影響するなど様々な弊害があり、特に自覚症状がなくても抜歯しておいた方がよいことが多い歯です。

歯科医師も必要性があつて抜歯のご提案をするのですが、特に症状もないのに痛い思いをして抜歯をするなど、普通は嫌です。親知らずの抜歯を指摘された患者さんは、決まっても暗い顔をされま

歯並びなどに弊害も 高齢では抜歯、難しく

親知らずは個性的です。簡単に抜けるものから、極めて難しい抜歯になるものまで様々です。一般的には上あごよりも下あごの方が難易度が高く、術後の腫れや痛みも下あごの方が強い傾向にあります。また、下あごの親知らずは根っここの近くに太い神経が走行しており、極めて低い確率ですが神経損傷による知覚異常が残ることがあるため、術前にしっかりとレントゲンなどで診断したうえで、きちんと説明を受けて納得してから手術

に臨まれることが大切です。

できれば避けたい親知らずの抜歯ですが、できるだけ早めに抜いておいた方がよい理由は他にもあります。1つは高齢になると歯と骨が癒着してくるため、抜歯が非常に難しくなることです。もう1つは女性に限ったことですが、妊娠時に親知らずの周囲が炎症を起こしやすいことと、その際に抗生薬などの使用が制限されることです。

親知らずの抜歯は大学病院など口腔外科専門医で行わなければならない場合もありますが、かかりつけ歯科でも可能な場合もありますので、ぜひ一度歯科医師に相談してみてください。

(乙訓歯科医師会)

大橋瑞己